

植物に名前が聞けたら

——廣井先生の思い出——

松本光太郎

1. 「あなたの御名前は何ですか」と聞けたら

廣井先生が理科系の御専門であるのに対し、私は文化系の出身であるが、専門としている文化人類学は、ちょうど理科系と文化系の中間の学問のようなところがある。大学のいわゆる教養課程で「文化人類学」を教える場合には、一年の講義のうちで数回は自然人類学、つまり霊長類学や人類の進化、「人種」（この言葉はやや古くなりつつあり、人類の変異と言うべきであろう）などを数回だけ教える場合が少なくない。研究の面でも、現在では「先住民民族」と呼ばれるようになった人々の文化や社会を研究する上で、生態環境の問題を避けて通ることはできない。

廣井先生とは、後で述べるような事情で、中国の雲南省の調査に二回ほど、御同行させていただく機会があったが、その旅を通じて、廣井先生が実はまだ駒場の教養課程の学生の頃には人類学（この場合は前述の自然人類学のことであるが）を志望していらした時期があったというお話をうかがった。不確かな記憶であるが、当時の廣井先生は、生物学の中でも人間に御興味をお持ちで、ぜひ人類学をやりたいというお気持ちであったが、周囲の方たちの御理解が得られず、「そんなものでは、何の役に立つかわか

らない」と反対され、植物学を選択されたというようなお話だったように思う。おそらく、廣井先生には、植物学を御専攻される、より積極的な動機をお持ちだったのではないかと思われるが、ともあれ、これも何かの御縁というものであろうか。

廣井先生は、日本の文化人類学の先駆者の一人である、国立民族学博物館初代館長の梅棹忠夫氏の研究のルーツについて、私よりもはるかによく御存知であった。廣井先生のお話によれば、梅棹氏は遊牧民族の研究でユニークな業績を上げて有名になったが、それは動物の群れの動きや動物の数を把握する理論であり、はじめはバケツの中のオタマジャクシの動きを今風に言えばシミュレートする研究が元になっていて、それに必要な数学の理論、現在で言うところの「複雑系」の理論であるかと思われるが、それを数学が専門のある先輩の研究者から伝授されたといういきさつがあるというお話であった。梅棹氏は、「文明の生態史観」で知られており、日本とヨーロッパの平行的発展という点に関して、加藤周一氏も高く評価しているが、その意味では必ずしも全てが彼のオリジナルではなかったわけである。学問の学際性の重要性を再認識させられた、非常に貴重なお話として、非常に深く印象に残っている。

このように、人類学についても深い造詣をお

植物に名前が聞けたら

持ちの廣井先生と調査に御一緒する貴重な経験を持ったわけであるが、その調査の中で、廣井先生がとても感慨深そうに、そしてまた、ある意味でうらやましそうに、私に話されたことがある。それは、ちょうど雲南の最も南側の奥地で、山の反対側はもうラオスがすぐそこという場所でのことであるが、クツォン人という、中国建国以来、何十年にもわたって、いったいどんな民族なのかが確定していなかった民族集団についての聞き取り調査を行っていた時のことであった。

私の研究テーマの一つは、いわゆる民族のエスニシティであり、中国の56の民族がどのようにして分類され、また政治的に承認されてきたのか、そしてそのことがそれぞれの民族自身にとってどのような意味を持っているのかということであった。中国では、政府による民族集団としての認定作業のことを「民族識別工作」と呼ぶが、このクツォン人は、中国の改革開放以後もいわゆる「未識別の集団」として扱われて来たため、多くの研究者の注目を集めて来たが、外国人としてクツォン人の調査をしたのは、おそらく私たちが世界で初めてのことであった。クツォン人の言語は、おおまかに言えば、中国で早くに公認されているハニ族（タイのアカ族と同一集団）とラフ族の中間ぐらいであるとされ、亡くなられた私の指導教官である大林太良先生によれば、ラオスからタイに分布する、最近まで現存したモンゴロイドでは数少ない狩猟採集民である「ピートンルアン」の人々と本来は同族ではないかとも言われてきた。中国の古い漢語の文献などには、「古宗」（発音はクツォン）、「鍋磋」（発音はグーツォ）などと書かれて来たが、これは漢民族からの呼称である可能性

もあり、必ずしも正確ではない。そのため、クツォン人の村の小学校の先生たちに、私が中国語で「あなたたちのことを、あなたたちの言葉で、何と呼ぶのですか？」と尋ねていたのであるが、質問されたクツォン人の人々は、初めはいったい何のことを聞かれているのかが、すぐにはわからない。横にいた、同行した中国側の人々は、しびれを切らして、「あなたたちの、民族の自称を答えて下さい」と言ってしまったが、これは禁句である。文化人類学では、聞き取り調査の相手にできるだけ先入観を持たせないようにするため、普通では考えられないほど、できるだけ遠回りの質問をするのがセオリーである。悪いとは思いつつも、中国側の同行者に黙っていただくよう御願ひし、何回かやりとりをくり返しているうちに、ようやくクツォン人の村長さんや先生が、ぼそぼそとした声で「グーツォ」とか「クーツォ」と言い出した。中国側の同行者は、すぐさま「彼らだって、自分のことがよくわかっていないのだ」と口をはきんだので、クツォン人の人々は、それっきり黙ってしまった。当時の雲南研究会（現在の雲南研究所）の調査は、まだ中国の対外開放が本格的に進んでいないころの団体訪問方式だったので、専門違いの聞き取り調査にも、基本的に全員が同行することになっていた。一緒に来られた先生たちも、いったい何をもめているのか心配されていたので、私も聞き取りをしながら、適宜通訳をしなければならなかった。みなさんなんとなく顔をしかめていたが、その中で、廣井先生一人だけが、感慨深そうにおっしゃったのが、次の一言である。「何となく、松本さんが調査していることが、少しわかって来ました。でも、松本さんは『あなたは誰ですか』と聞けるから

いいですね。私は、植物に『あなたの御名前は
何ですか』と聞くことはできないから。この一
言の中に、廣井先生と人類学との関わりはもち
ろん、植物も人間も含めた、この宇宙全体の生
き物に対する深い愛情があふれて来るようであ
った。

実際、廣井先生との旅は、スタディツアーと
して考えても、最高であろう。とにかく、道端
で行き会うあらゆる木や草花の名前について、
全くと言ってよいほど知らないものはないので
ある。たまに日本語の名前が出てこないことが
あっても、学名と、それが何かの一種であるこ
とぐらいは、実に簡単そうに答えて下さる。こ
ちらもだんだんと植物の世界に誘われ、本来の
調査目的など忘れてしまいそうになる。たしか
に植物に名前を尋ねるわけには行かないが、そ
のかわりに、廣井先生はおそらく世界のほとん
どの植物の名前を憶えていらっしやるのであろ
う。しかし、その名前は人間の側がつけたもの
である。そういう意味では、政府のつけた名前
と自分たちの言語による名前の両方がある、中
国の少数民族とどこか似ている。人間がつけた
名前を知っていることに決して傲らず、植物の
本当の気持ちを知りたい、そんな思いが伝わっ
てくるような出来事であった。

2. 雲南への御関心

雲南と廣井先生との関わりについて、初めて
お話をうかがったのは、私がこの大学に就職し
てまもなくのことであった。廣井先生は雲南の
植物に対して非常に熱烈な御興味をお持ちの御
様子で、大量の中国語の資料も買い込み、また
現地の研究機関とも共同研究の話しが持ち上が

っていて、1989年の天安門事件がなければ、と
つくに雲南へ出かけていたかもしれないという
お話だったように記憶している。私も、調査日
程の時期が重なるようであれば、ぜひ一度、雲
南の方へ御一緒したいと考えたものである。残
念なことに、廣井先生は当時の一般教養担当教
員の組織である一般部会の長である短期大学部
長に選任された後、激務に病院の手術なども
重なって、御体調を崩され、しばらくご静養さ
れることとなった。このため、あれほど楽しみ
にされていた雲南訪問は、当面は延期されるこ
とになったのである。

廣井先生と雲南に御一緒する夢が実現したの
は、1995年に、現在は本学学長となられた村上
勝彦先生を中心として、本学に雲南研究会が発
足してからのことである。この雲南研究会は、
それ以前に東京女子大学の故隅谷三喜男元学長
と故大林太良東京大学名誉教授を中心として行
われた、トヨタ財団の助成を受けた日中共同研
究プロジェクトからの継続研究という性格を持
っていたが、新たに本学の異なる専門領域で中
国や雲南に御関心をお持ちの先生にもお声を
おかけして発足することとなった。その際に、廣
井先生にもお声をかけしたのである。廣井先
生も、ようやく御体調が回復され、果たせな
かった夢をぜひ実現させたいということで、快諾
していただいた。文化系の研究者のメンバーが
多かっただけに、理科系の研究者である廣井先
生の存在は大変貴重であった。しかもすでに雲
南に強い御関心をお持ちなのであるから、なお
さらであった。雲南の自然がこの上もなく貴重
なものであることは、私にも漠然とはわかるも
の、具体的にどのような動物や植物がいて、
なぜそれが貴重なのかということについての具

植物に名前が聞けたら

体的な知識をお持ちなのは、おそらく廣井先生だけであった。さらには、後述するように、廣井先生が日本国内においても、自然保護の運動の重要なリーダーであることも、この研究会にとって、非常に心強いことであった。

3. 雲南とラオス

廣井先生の雲南での調査に対する期待は、私がお話をうかがった範囲では、廣井先生がそれ以前に行われたラオスでの調査が大きく影響したものであると思われる。廣井先生が指摘された、雲南における自然保護の重要性の理由としては、第一に、雲南のシーサンパンナ・タイ族自治州に隣接するベトナム、ラオスで、1995年に二種の有蹄類の新種が発見されたことで、これは20世紀に入ってからの発見ということでは、奇跡に近いことで、雲南においてもその可能性が期待されること、第二に、やはりラオスに隣接した、シーサンパンナのモンラー県で、1970年代はじめに新種記載された、高さ60m以上にも達する「望天樹」であり、これも新種記載が1970年代はじめということ、やはり奇跡に近いということ、第三に、私たちが訪れた頃のシーサンパンナは、焼畑地やゴム林の拡大により乱伐が進み、本来の姿を何とか保っている地域は限られていたが、廣井先生はそうしたわずかな自然に対する希望を決して捨ててはいなかったことである。この点で、やはりシーサンパンナを訪れた山中速人先生（当時は東京経済大学教授、現関西学院大学教授）が、どこまでも続くゴム林を見て、「シーサンパンナは砂漠みたいだ」とおっしゃったことや、この研究会のメンバーである雲南民族学院教授の劉剛

先生が、シーサンパンナの急速な変化を目の当たりにして、「シーサンパンナはもうだめになってしまったのかもしれない」とおっしゃったこととは、対照的な感じがする。廣井先生のお考えは、愚直なようにも聞こえるが、実際にはそうしたわずかな自然を見捨ててはならないという深い思いやりと、自然保護に対するゆるぎない信念に支えられているのではないだろうか。

こうした廣井先生の自然保護の主張には、亜熱帯・熱帯の原生林は、焼畑耕作などにより伐採されても、その破壊が一時的なものであれば、樹木の根や草花の種が燃えずに残っていて、放置しておけば、自然に元の生態系が回復されるという科学的な根拠がある。廣井先生は、かつての東南アジアにおける焼畑耕作の事例を引き合いに出して、本来の焼畑耕作では、何年に一回火入れをすとか、休閑させるのは何年間であるといった数字的な概念はなく、新たに成長した樹木がどのくらいの太さになったら伐採して火入れをするというものであったことを説明して下さった。そういう時代には、人口と森林面積のバランスがとれていたので、焼畑は決して深刻な自然破壊ではなく、人間と自然が共存していく生活様式であった。廣井先生は、自然保護区の中に住んでいる住民の移転問題に関しても、そうした人々がなんとか元の暮らしを続けて行くことはできないものかという意味のことを述べられていたが、これも以上のような議論にもとづいたものなのであろう。焼畑耕作に対する評価をめぐることは、焼畑地を放棄した後にまず生えてくるのは「バンブー」（竹）であるが、そのタケノコが、住民の貴重な食料となっており、救荒作物のような意味も持っているということである。上述の劉剛先生は、この廣井

先生のお話が深く印象に残ったようで、その後は竹のことを「バンブー」と呼ぶようになった。

雲南とラオスの関係については、劉剛先生のおはからいで、中国共産党雲南省委員会宣伝部発行の『東陸時報』紙の取材を受け、1994年4月17日付けの同紙に掲載された。廣井先生のお考えは、雲南とラオスを含む周辺諸国が協力して、国際的な自然保護区を設立しようというものであった。廣井先生が念頭に置かれていたのは、前述の有蹄類の発見のこともあったが、もう一つは雲南に分布するアジア象の保護のことである。シーサンパンナのアジア象は、当時約200頭であるが、問題はそれが三つの地域に孤立していることで、種の保存に必要な100頭にいずれの群れも達していないからである。アジア象の保護のためには、まずはシーサンパンナの各自然保護区の間に「象の回廊」を設け、象が自由に行き来して遺伝子の交流を可能にすることが必要であり、さらにその「象の回廊」はラオスとの間にも設ける必要があるということであった。「象の回廊」については、当時のシーサンパンナ自然保護区管理局局長の熊雲翔氏との懇談の席でも話題となり、一昨年のモンラ一県での調査の際に、自然保護区管理局の若い職員の話でも言及された。廣井先生の問題提起が、現地に一定の影響をもたらしたのかもしれない。熊局長は、まずはその名字がユニークで、自然保護区の局長にぴったりであるが、廣井先生とも共通する話題が多く、旧友のように親しく語らっていた。

その後、私もラオスを訪問する機会を得たが、ラオス北部の風景は、まさに写真などで見たことのある、何十年も昔のシーサンパンナであった。今では戻ることのできない、何十年も昔に

戻ったような感覚を覚えた。廣井先生もかつてラオスを訪問され、電気もない村で家を借りて宿泊したが、村人が親切に蚊帳を吊ってくれたことが印象的だと、懐かしそうに話されていた。ラオスの自然も決して手つかずのものではないが、廣井先生はシーサンパンナを訪れたとき、そこにラオスの風景を見ていたのではないだろうか。

廣井先生とは、雲南への調査に、二度同行させていただいたが、様々なエピソードがある。一つめは、「カメラの水没事故」で、この文章の冒頭で述べたクツオン人の村へ行く途中、小さな川を渡った時のことである。川に置かれた踏み石伝いに渡って行く前に、私はお荷物を代わりにお持ちすると申し出たのであるが、廣井先生は「いいから、いいから」とお断りになられ、川を半分ほど渡ったところで、石に滑って見事(?)カメラと一緒に水につかってしまったのである。ここで驚いたのが、廣井先生のお使いのカメラは、1980年代半ばにミノルタから発売された世界初のオートフォーカス一眼レフカメラのミノルタα7000で、レンズは50mmマクロの一本だけという、実にシンプルな組み合わせだったことである。α7000も発売当時はまさに垂涎のものであったが、すでに十年以上が経過しており、作動音や反応速度などの点では、とくに買い換えていて不思議はない。できるだけ軽装で臨みたいということなのであろうが、改めて廣井先生が物を大切にされていることを感じた。それだけに、カメラの水没はなんとも残念な出来事であった。二つめは、その時の調査に、廣井先生の教え子である荻原次氏が行っていたことである。廣井先生のまさに助手として、てきぱきと廣井先生のお手伝いをして

植物に名前が聞けたら

いた。私の場合にも、ゼミの卒業生がタイで働いており、私がタイに調査に行く時には、いつも御世話になっている。思うに、本学には事実上助手という制度が存在しないが、東経大というところは、そうした教員に一人か二人ぐらいは助手にあたる人を与えてくれるところであると感じた。三つ目は、1997年の二回目の調査の時であるが、当時は雲南省の省都である昆明までの直行便がなく、香港で飛行機を乗り継いでいたが、それは香港出国の時のことである。私と廣井先生は、一緒に出国カウンターに並んでいて、廣井先生が私の前に立っていたのであるが、その前にならんでいた、おそらく南アジア系の女性が、出国審査を受ける際に、パスポートにはさんでいた書類を落としたのに気づかなかったのである。私は英語で声をかけようとしたのであるが、その前に廣井先生が、順番待ちの赤いラインを踏み越えて、その書類を拾いに行ったのである。それを見ていた空港の係員が、あわてて廣井先生を制止しようとしたが、廣井先生は全く意に介さない様で、私は思わず「廣井先生、だめですよ」と叫んでしまった。結局、書類を落とした女性が気づき、一件落ち着いたのであるが、廣井先生が非常にマイペースであることにあきれると同時に、私自身が目に見えない「決まり」のようなものに、知らず知らずのうちに縛られているのかもしれないと感じた。他の人とは違うことを言ったり、行ったりすることの大切さについて、改めて考えさせられた。

廣井先生との調査は、この時が最後であった。帰国されてから、廣井先生から「体力に自信がなくなったので、次回の調査にはいけないと思います」というお話があった。やはり、健康状

態の回復が完全にはいかなかったようである。2004年3月に、廣井先生は定年退職を迎えられたが、それを期に、研究室に收藏されていた、大量の雲南の植物に関する中国語の文献資料を、雲南の研究機関に寄贈されたとのことである。廣井先生の研究室に立ち入られた経験のある方であれば御存知かとも思うが、これらの資料は廣井先生の研究室の蔵書の中でかなりの比重を占めていた。また、これらの資料は発行年も古く、現在では購入不可能であり、中国でも貴重な文献資料となっている。こうした資料が、中国の若い研究者に活用していただければ、廣井先生としても本望ではあるまいか。廣井先生との調査は、実は完全に終わってしまったわけではない。廣井先生は劉剛先生と意気投合し、現在劉剛先生が務める沖縄大学のある沖縄へ何度も出かけている。劉剛先生のお話では、廣井先生は「また雲南の調査にぜひ出かけたたい」とおっしゃっているそうである。2004年秋には、本学に雲南研究所が設立されたが、廣井先生にもまだまだこれから、調査、執筆ともにお力をお借りしたいと願う次第である。

4. 純米酒のすすめ

廣井先生のことで、忘れられないのが、無類のお酒好きということである。私もお酒は好きなので、何回か御一緒させていただいたが、廣井先生から教えていただいたのは、「日本酒は純米が一番うまい」ということである。何年も前のことであるので、理由はよく覚えていないが、近年、私もやはり純米が一番うまいと思うようになって来た。舌にぴりぴりせず、お米の味がするというのが魅力であろうか。悪酔いし

ないし、健康にも良いということなのだろう。しかしながら、廣井先生は、御体調が回復されてからも、再び純米酒を飲み始めたのである。曰く、「酒をやめるなんて、考えていない。これで死んだって、後悔しない。」という。お酒のことと言えば、もう一つ忘れられないのが、オセアニアの方へ調査に行かれた時のことだそうだが、夜になって酒盛りをしていたが、酒がなくなってしまったので、標本を漬けておいたアルコールの、飛びつきり度数の高いものを飲んだというお話で、漬けていた中身には蜘蛛が入っていたという。雲南に行く時に、北京経由で行くこともあったが、この話しを対外経済貿易大学の若い先生にお話したところ、廣井先生には「蜘蛛酒の先生」というあだ名がついてしまった。廣井先生の後任で来られた先生は、蜘蛛や蟻の研究が御専門であるとうかがっているが、これも何かの御縁であろう。

4. 結び

一つだけ、廣井先生がうらやましくてしかた

がないことがある。それは、廣井先生が、宮崎アニメのトトロのイラストの入った名刺をお持ちのことである。肩書きは、「財団法人トトロのふるさと財団理事長」であり、狭山丘陵の森林保護活動のリーダーである。時間をつくっては、宮崎駿氏たちと御一緒に、里山の保存、雑木林の手入れといった活動に取り組んでいる。財団運営は財政的にも厳しく、かなりの私財を投じられたようである。この名刺は、こうした立派な行いがあってのもので、ファンシーグッズと一緒にしてはならないのであろう。思うに、研究というものは、それが社会にどのように貢献できるかというところで価値が問われるもので、廣井先生は純粋な学問的な関心と社会への貢献を同時に実践された、本当の意味での学者であった。私たちは本学にあって何をなすべきか、廣井先生の足跡から学ぶものはまだ少なくない。

